

グイ・ガナ言語民族誌的辞書の編纂：速報

中川 裕

はじめに

1. 研究目的
2. 調査・研究の射程
3. 研究の背景と意義
4. グイ語・ガナ語の語彙の類型論的稀少特徴
5. プロジェクトがもたらす成果物

はじめに

本稿は、2016 年度に開始した新しい研究プロジェクト「グイ・ガナ言語民族誌的辞書の編纂」を取り上げ、その目的と射程、研究の背景・意義、グイ語・ガナ語の類型論的特徴、期待される成果について手短かに報告する。この企画は、もともと科研費基盤研究 (B) (海外学術調査)「コエ・クワディ語族カラハリ・コエ語派の言語学的ドキュメンテーション」(課題番号：25300029；研究代表者：中川裕)に関わり、この研究課題の実施過程で派生した構想である。とはいえ単なる下位プロジェクトではなく、もとの科研プロジェクトにはなかった特色を中心に据えた、いわばスピノフ研究企画だ。新プロジェクトの調査対象言語は科研プロジェクトのそれに含まれるし、新プロジェクトがもつばら取り扱う語彙という領域は科研プロジェクトの射程にも包括される。しかしながら両者には際立った違いがある。今回のプロジェクトは、科研プロジェクトの語彙調査部門とは異なり、語彙素の百科事典的意味と言語社会がそれに与えている文化的意味を調査し文書化しようとする点にある。それは各語彙素や語彙素群が形成する意味領域を対象とする言語学的民族誌と呼ぶことができる。

新プロジェクトの実施にあたっては2つの研究資源を利用する。一つは上記の研究課題(25300029)による学術振興会科研費研究助成で、もう一つは東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題の「南西カラハリ・コエ語派の語彙の民族言語学的ドキュメンテーション」(2016-2018 年度)である。後者は、本プロジェクトの主要な研究集会の運営体となる。

1. 研究目的

本研究プロジェクトの目的は、カラハリ狩猟採集民グイ (Glui) とガナ (Glana) を対象に、言

語学者2人と人類学者4人がこれまで蓄積してきた一次資料を統合し分析することで、言語学と人類学の知見を相互参照する言語民族誌としての総合的語彙記載を行うことにある。その過程で、同2言語の語彙がもつ語彙意味類型論 (lexical semantic typology) 的な特色について考察し、言語普遍性・言語相対性の議論への貢献をめざす。

2. 調査・研究の射程

本研究が対象とする言語はコエ・クワディ語族カラハリ・コエ大語派に分類される3語派（図1参照）の一つ南西カラハリ・コエ語派に含まれるグイ語とガナ語であり、その言語話者集落は南部アフリカ内陸のボツワナ共和国の中央カラハリ地域に分布し、その話者人口はグイ語が700人程度 (Nakagawa 2010)、ガナ語も同規模と推定される。

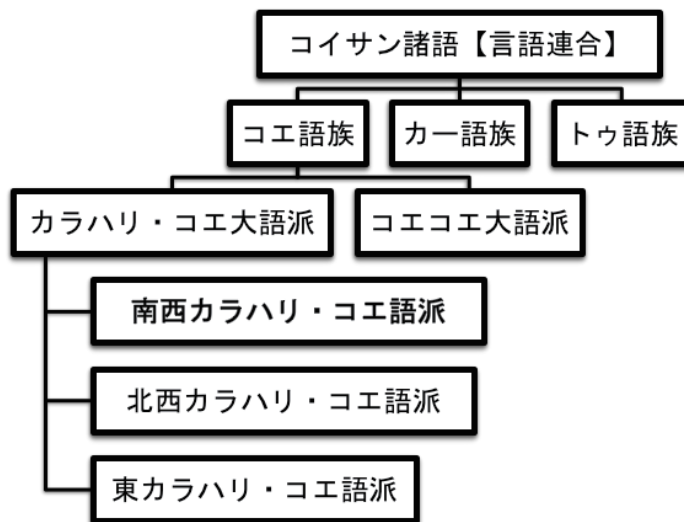


図1 コイサン諸語（言語連合）における3つのカラハリ・コエ語派

現在の彼らの社会には、カラハリ乾燥帯で狩猟採集生活をしながら伝統的文化語彙を日常的に使いこなしてきた経験のある最後の世代が生存する。当プロジェクト参加研究者は長年にわたる言語学・人類学の共同調査によって、未知であった狩猟採集民グイ・ガナの文化語彙素を百科全書的情報とともに、それぞれの研究領域における調査の過程で記録・蓄積してきた。しかしながら、現時点では、その語彙素記録は多くが未刊行資料であり、また刊行されていたとしても様々な研究トピックごとに個別的に記載されていて、まだ総合的な言語学的記載の姿をとるに至ってはいない。

本研究では、プロジェクト参加者が未整理の調査成果を含めた語彙関連資料をもちより、それを統合して記録信頼性の検証をし、言語学的な整備をした上で、言語民族誌的ドキュメンター

ションを行う。研究対象となる語彙関連資料には 3 種類ある。第 1 に、語彙素とそれに関連する百科事典的情報の記載であり、多くの重要な部分はフィールド・ノートに記された未刊行記録にも含まれる。第 2 に、語彙素の使われる文脈資料であり、具体的には語彙素の現れるテキスト資料である。第 3 は、語彙素が指示する事物の非言語的資料（画像・映像や道具などの物質文化要素）である。

本研究の活動本体は次の 4 つの部門に要約できる。

- (1) 上記の 3 種類の資料の集約とデータベース化 (i.e. 目録とコーパス作成)
- (2) 語彙素ごとに資料ソースを横断する点検によるデータの精緻化
- (3) 言語学的分析 (i.e. 意味論的分析と語用論的分析)
- (4) 分析結果の編集と文書化

本プロジェクト参加研究者は以下の通り [5 0 音順] : 大野仁美 (麗澤大学)、菅原和孝 (京都大学名誉教授)、高田明 (京都大学)、田中二郎 (京都大学名誉教授)、中川裕 (東京外国語大学)、丸山淳子 (津田塾大学)。

3. 研究の背景と意義

グイ語・ガナ語が属するカラハリ・コエ大語派の語彙研究は資料収集が難しいことがすでに 1970 年代から指摘されている。ウエストファルは既成の言語調査表を用いたこの語派の語彙調査の限界に触れて、次のように述べている。

“It was astonishing how many of English meanings set down for that questionnaire made no sense... in the ‘Bush’ context.” (Westphal 1971: 398)

この指摘から 45 年を経た現在に至るまで、この語派の狩猟採集民的文化語彙の精緻な言語学的記載は行われていない。その意味で、本プロジェクトが目指す言語民族誌的辞書の編纂は実証的・記述的な意義を持つ。

それと同時に本研究には理論的な意義も認められる。それは、グイ語とガナ語に語彙意味類型論における従来の理論への反証となる現象が多領域にわたり観察されるためである。これら 2 言語の語彙は、通言語的に希少な特徴を豊富に持つ。言語普遍性や言語類型論の研究は、この約 40 年の間に、世界中の言語を広くサンプリングする広域言語データによる調査や考察が格段の進歩を遂げ、世界の言語が広く共有する一般的構造特徴や一般原理の理解についての洞察が数多くもたらされた。つまり、言語の構造的特徴の世界的規模での一般傾向に関する理解が拡大された。その代表例は WALS Online (The World Atlas of Language Structures Online) (<http://wals.info>) である。最近になり、広域データ類型論による一般化では周辺の現象として除外されてきた、通言語的頻度の低い特徴に注目する新しい類型論的アプローチが、「稀少性

の類型論 (“typology of *rara*”)」などの名の下に明示的に提案され、それが形態統語論の領域で成果をもたらし始めている (Wohlgemuth and Cysouw 2010)。「稀少性の類型論」的接近法、つまり、類型論における稀少特徴の精査とその理論的含意の探求は、世界の言語の共通特徴や傾向ではなく、言語多様性の限界についてのよりよい理解を可能にする。また、そこには、理論の記述力・説明力の発展へのインパクトが期待される。本研究プロジェクトは、この調査研究指針を意識しながら、稀少特徴の多く観察されるグイ語・ガナ語の語彙論の事例を扱い、高度に詳細で綿密な分析と考察により、語彙意味類型論的な貢献を目指す。

4. グイ語・ガナ語の語彙の類型論的稀少特徴

では、具体的にはグイ語・ガナ語の語彙にいかなる類型論的稀少特徴が観察されるのであろうか。現時点でプロジェクト参加者がすでに報告している知見や予備調査によって明らかになってきた未刊行の発見から、6つの意味領域における稀少特徴を選び、その観察を以下に要約しよう。

4.1. 親族名称体系

親族名称体系 *kinship terminology* の通言語的比較と一般化は、言語人類学の古典的調査トピックの一つであり、世界の言語に認められる親族名称体系は、次の6つのいずれかのタイプに該当するという類型論が提案されている：エスキモー型、ハワイ型、イロコイ型、スーダン型、オマハ型、クロウ型 (e.g. Murdock 1985)。しかしながら、グイ語・ガナ語の親族名称体系はこの6タイプのいずれにも該当しない。それは、本プロジェクト参加者の大野仁美が発見し “split nuncle” と名付けた世界でもユニークな構造的特徴を有する体系をグイ語・ガナ語が持つためである (Ono 2010, 2011)。

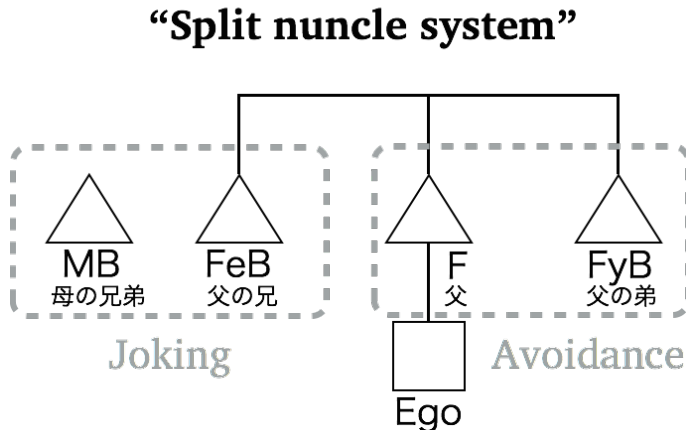


図2 分裂オジ・オバ体系の一部

その構造的特徴は親の同性キョウダイが2つの別の範疇に分裂する点にある。図2はこの構造特徴を、親が男性である場合で例示している。父親の弟は父親と同じ形態素によって名づけられる明示的範疇を形成し、父親の兄は母親の兄弟と同じ形態素によって名づけられる明示的範疇を形成する。親が女性である場合にも、これと同様の構造が認められる：母親と母親の妹は一つの範疇を、母親の兄と父親の姉妹はもう一つの別の範疇を形成する。このように、親の同性キョウダイは2分割される。このような構造を持つ親族名称体系は、従来の親族名称体系の6タイプにはなく、世界の言語でもユニークな体系である。付け加えると、2分割された範疇のうち、親の含まれる範疇は、自分 (Ego) との間に忌避関係 (avoidance relation) を持ち、もう一つの範疇は自分との間に冗談関係 (joking relation) を持つ (図2の二つの灰色点線の四角を参照)。このユニークな構造的特徴は、このようにグイ・ガナの社会において行動を律する人間関係に呼応している。

4.2. 生物範疇名称

グイ語とガナ語がもつ第2の類型論的稀少性として、動物名称の分類上の特徴が挙げられる。私は、中川 (2001) で、「動物名称」という意味領域を扱い、グイ語における無脊椎動物の範疇の分析が、従来の研究が主に注目してきた民俗分類 (folk taxonomy) の普遍的原理である階層的樹形図モデルでは捉えることのできない分類タイプを発見し、その新しい解釈方法を提案した。さらに、最近の調査によって、グイ語・ガナ語の動物名称の階層的分類体系自体にも、通言語的に稀少な特徴があることが分かってきた。

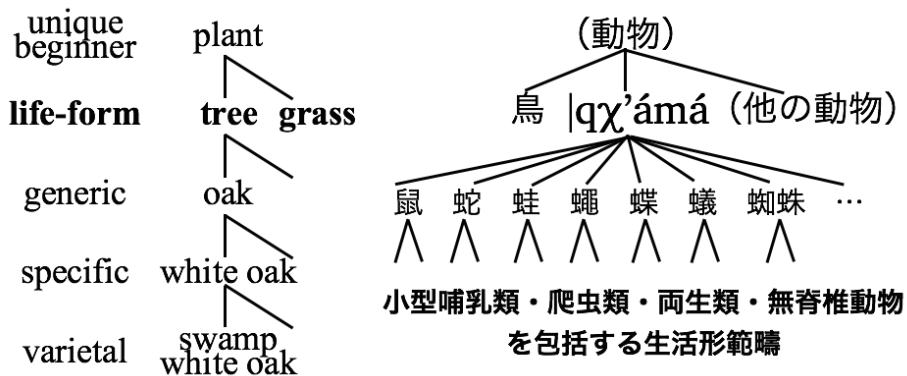


図3 グイ語・ガナ語の動物名称の階層構造的な分類

図3は両言語の動物名称の階層性の骨組を簡略的に示している。便宜的に漢字で記したクラスは明示範疇の一部である。かっこで括られた「(動物)」と「(他の動物)」には特定の総称は与えられていない。ここで注目すべき特徴は、生活形 (life-form) レベルの明示範疇 |qχ'ámá である。図3に示してある通り、この範疇が包括する動物の民俗属名 (generic) は、小型哺乳類、

爬虫類、両生類、無脊椎動物と多岐にわたる。これは、古い日本語の小動物の総称「蟲（ムシ）」に類似しているが、この様な範疇が生活形レベルで明示的で単形態素的に名称を持つ事例は通言語的に珍しい。

4.3. 色彩名称 color terms

色彩語彙は、古典的研究である Berlin & Kay (1969) と一連の後継研究の成果によって、人間の視覚神経生理が言語の意味構造に反映し、生得的普遍性を示す代表的領域と見なされてきた。彼らの提案する色彩語彙体系の発達原理（基礎色彩語の階層性）は、その後の新知見と統計的手法の洗練によって修正が加えられたが、色彩語彙が言語文化相対性ではなく生得的普遍性によって制限される意味領域であるという強い主張は依然として多くの論者に保持されている。

Berlin & Kay 流の調査の伝統は The World Color Survey (WCS) として、サンプル言語をさらに拡大し、文字をもたない 110 言語を追加して現在に至っているが、いまだに WCS のデータベースにはコイサン諸語の事例がまったく含まれない。また、他の研究領域（たとえばコイサン言語学やコイサン民族誌）でも、コイサン諸語の色彩語彙が考察の対象となったことはない。

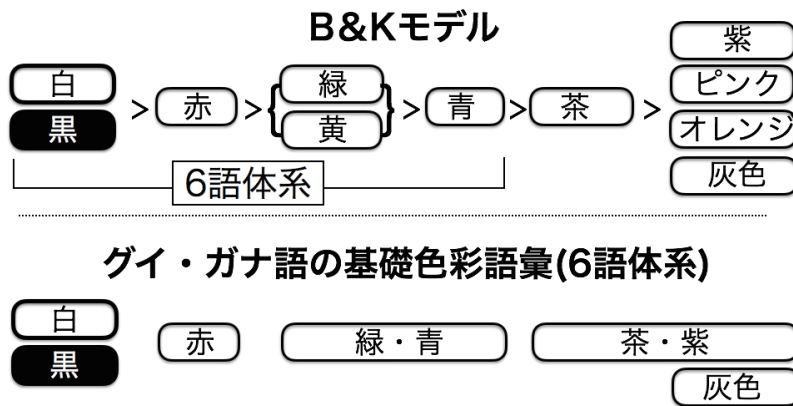


図4 Berlin & Kay (1969) の基礎色彩語の階層性とグイ語・ガナ語の基礎色彩語

本プロジェクト始動に先立って行った初期調査の結果は、グイ語・ガナ語が、Berlin & Kay (1969) から WCS までの知見にはなかった新しい特徴をふくむ色彩語彙体系をもつことを強く示唆する。また、この体系は Berlin & Kay 等の主張する基礎色彩語彙の普遍的階層性への反証となる。図4は Berlin & Kay (1969) の提案する基礎色彩語彙の階層性とグイ語・ガナ語の基礎色彩語を比較して示している。グイ語・ガナ語の6語体系は、Berlin & Kay の階層モデルが予測する6語体系とは異なり、緑と青の未分化色彩語を持ちながら黄を欠き、また、6語体

系でありながら、茶と紫の未分化色彩語と灰色とを基礎色彩語として持っている。このような基礎色彩語体系は、通言語的に極めて稀少なものである。

4.4. 知覚動詞

上に述べてきた3つの意味領域は、いずれも、普遍性や類型論的一般化に関する議論の長い歴史を持つ。これらよりは比較的最近の議論の一つに、知覚動詞という意味領域における五感の普遍的階層性の提案があげられる (Viberg 1984, 2001)。この第4の意味領域においても、グイ語・ガナ語には通言語的に極めて稀少な特徴が観察され、それは提案されている普遍的階層性のモデルへの反証となる。

図5はヴィベルイ (Viberg 2001) の階層性モデルとグイ語・ガナ語に観察される現象を模式的に要約している。ヴィベルイによると、知覚動詞が表す5つの感覚(五感)は、多くの言語で4つ以下の動詞で表現され、一つの動詞が二つ以上の感覚を意味拡張によって表現する。このような複数の感覚を横断する意味拡張を通言語的に観察すると、意味拡張の方向には制限が認められる。その制限は、図に不等式で示した「視覚>聴覚>その他」という五感の階層性に沿って、図の上部にある右向きの実線矢印で表すことができる。したがって、視覚動詞が聴覚に意味的に拡張され、また、聴覚動詞が味覚に拡張されることはあるが、その逆はない。この意味拡張の方向は普遍的とされる。



図5 知覚動詞の表す五感の階層性と意味拡張

しかしながら、グイ語・ガナ語では、その方向とは逆方向の意味拡張が観察される。図の左上向きの点線矢印が示すように、グイ語・ガナ語では味覚動詞が聴覚に意味拡張される。例えば、これらの言語では、「あの雷鳴はライオンのような味がする」という表現によって、「あの雷鳴はライオンのように聞こえる」の意味を表す(「ように聞こえる」という意味の動詞はなく、それは「のような味がする」を基本的意味とする動詞の意味拡張によって表す)。

4.5. 飲食動詞

語彙類型論的な通言語比較研究において、知覚動詞よりもさらに最近になってから調査対象

とされるようになった意味領域に「食べる」「飲む」などの飲食動詞がある (Newman 2003)。この5番目の意味領域においても、グイ語・ガナ語は他に報告のない通言語的に珍しい特徴を示す。それは、「食べる」を意味する動詞の語彙素化パターンに見られる。グイ語・ガナ語には、一般に「食べる」をもっぱら意味する総称的な動詞はなく、対象となる食品タイプ（肉と肉以外）による2つの「食べる」が独立した語彙素の地位を持つ（肉、植物、昆虫を表す形態素と二つの「食べる」の形態素は無関係）。すなわち、表1の通りである。

表1 グイ語・ガナ語の2種類の「食べる」

「食べる」動詞	食品タイプ	食品獲得手段
<i>qχ'óō</i> 'eat.meat'	脊椎動物の肉	狩猟
<i>ʔúũ</i> 'eat.non-meat'	植物・昆虫	採集

この表に示す通り、「食べる」の語彙素化には、摂取する食品の2タイプが関わり、さらにその2タイプは獲得手段の点でグイ人・ガナ人の伝統的な生業である狩猟および採集との呼応が観察される。総称的な「食べる」を欠き、食品タイプによって特定された2つの「食べる」を独立した語彙素として持ち、しかもこの語彙化パターンが生業という言語外要因によって構造化されている事例は通言語的に稀少であり、Newman (2003) にも報告はない。

4.6. 温度語彙

最後に、ごく最近になって通言語的比較の成果が論じられるようになった語彙意味論的に興味深い意味領域である温度語彙について述べる。この領域を扱った最大の成果は、Koptjevskaja-Tamm (2015) の共同研究プロジェクトによるアンソロジーであり、そこでは広範囲の系統、地域、類型を覆う50を超えるサンプル言語による通言語比較の結果が論じられている。その基礎となる資料収集は、プロジェクトが用意した統一的調査表により制御されている。私は同調査表の提供を受けて、グイ語を対象とした初期調査を行った。その結果、特に温度語彙 (e.g. 熱い・冷たい) が示す意味派生に、極めて珍しい事実を観察した。

温度感覚の表現 (熱い・冷たい) は、様々な他の感覚への意味派生をすることが通言語的に広く観察されている。特に言語横断的に繰り返し確認されるのは、感情・心理・苦痛・辛味への意味派生であり、それはグイ語にも観察される。しかしながらグイ語には、他の言語では報告されていない二つの感覚への意味派生が発見された：聴覚 (音) と嗅覚 (臭) である。しかも、表現の対象となる音および臭いは非常に特定化されていて、雷鳴と腐敗醜酵臭に限られる。温度語の「熱い」と「冷たい」が雷鳴と腐敗醜酵臭に適用され派生される意味は表2に要約する通りである。

表 2 ギイ語の温度語の聴覚と嗅覚への意味派生

音	熱い雷鳴	音色のピッチが高い
	冷たい雷鳴	音色のピッチが低い
臭	熱い臭い	腐敗臭が甚だしい
	冷たい臭い	醜酵臭がほどほどである

このような意味派生パターンは通言語的に稀少であり、ここには、温度感覚からどのようなメカニズムで聴覚（雷鳴のピッチの高低）や嗅覚（腐敗醜酵臭の程度差）の意味が派生され得るのかという理論的問題が浮かび上がってくる。

4. 7. 稀少特徴の重要性

以上 4.1 ~ 4.6 節で簡略的に述べたように、ギイ語・ガナ語の語彙には、類型論的に重要な 6 つの意味領域において、通言語的に稀少な特徴が認められる。この意味で、ギイ語・ガナ語の語彙意味論的な調査は、「稀少特徴の類型論」にとって理論的含意や示唆を潜在的に多く持つ事例研究と判断できる。本プロジェクトが生み出す語彙ドキュメンタリーは、(i) 世界の言語における語彙意味論の多様性の限界についての理解拡大と (ii) 特定の言語群にのみ偏在する稀少特徴の説明の発展という点で、重要な貢献をすることが期待できる。

5. プロジェクトがもたらす成果物

締めくくりに、このプロジェクトから期待される成果物を列記しておこう。具体的成果物は、カラハリ・コエ狩猟採集民の語彙特徴を解明する言語民族学的ドキュメンタリーであり具体的には次の 3 種類の媒体で提供する計画である。

- (1) 電子媒体によるドキュメンテーション資料(オンライン公開、プロジェクト後も適宜更新)
- (2) 紙媒体書籍 *A Concise Natural and Cultural History of the G|ui and G||ana* (仮題) を刊行
- (3) ドキュメンテーションの過程で考察した理論的知見の学術雑誌への投稿

参考文献

- Berlin, Brent and Paul Kay 1969
Basic Color Terms: Their Universality and Evolution. University of California Press.
- Koptjevskaja-Tamm, Maria (ed.) 2015
Linguistics of temperature. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Murdock, George, P. 1985
 Kin Term Patterns and their Distribution. *World Cultures* 1(4): stds25.dat, stds25.cod.
- Nakagawa, Hiroshi 2010
 Dialects of G|ui and G||ana, in Jiro Tanaka and Kazuyoshi Sugawara (eds.) *An Encyclopedia of |Gui*

- and* ||*Gana Culture and Society*, Laboratory of Cultural Anthropology, Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University, pp. 25-26.
- 中川裕 2001
「“虫”のグイ民俗範疇」田中二郎編『講座・生態人類学第1巻 カラハリ狩猟採集民』京都大学学術出版会 pp. 139-174.
- Newman, John (ed.) 2003
The Linguistics of Eating and Drinking, Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Ono, Hitomi 2011
Two types of kinship categorization in Khoe. In Christa König, Osamu Hieda, and Hiroshi Nakagawa (eds.) *Geographical Typology and Linguistic Areas*, pp. 269-278, Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Ono, Hitomi 2010
|Gui kinship verbs?: nouns and verbs in |Gui and linguistic differences found among its kinship terms. In Brenzinger, M. & König, C. (eds.) *Khoisan Languages and Linguistics*. Quellen zur Khoisan-Forschung 24: 251-283. Köln: Rüdiger Köppe.
- Viberg, Åke 1984
The verbs of perception: a typological study. *Linguistics* 21. 123-162.
- Viberg, Åke 2001
Verbs of perception. In Martin Haspelmath, Ekkehard König, Wulf Oesterreicher & Wolfgang Raible (eds.), *Language typology and language universals: An international handbook*, pp. 1294 -1309, Berlin & New York: Walter de Gruyter.
- Westphal, E. O. J. 1971
The Click Languages of Southern and Eastern Africa, in J. Berry and J. H. Greenberg, (eds.) *Current Trends in Linguistics*, vol. 7, pp. 367-420, The Hague and Paris: Mouton.
- Wohlgemuth, Jan & Michael Cysouw (eds.) 2010
Rethinking Universals, De Gruyter Mouton.

Ethnolinguistic lexical documentation of G|ui and G||ana: a preliminary report

NAKAGAWA Hiroshi

This paper reports on a new project of anthropolinguistic lexicography of two Southwestern Kalahari Khoe languages, G|ui and G||ana. Khoisan linguistics has recently revealed that G|ui and G||ana lexicons have typologically rare features in certain semantic fields, e.g., perception verbs and kinship terms. Ongoing research is further discovering cross-linguistically uncommon features in other semantic fields, such as folk taxonomy, color terms, eat-verbs, and temperature words. Based on the pilot study of this project, this paper sketches preliminary findings on cross-linguistically rare features of G|ui and G||ana lexicons. This project will provide Khoisan researchers of two different scientific backgrounds (linguistics and anthropology) with a platform for collaboration on new lexical documentation, which integrates up-to-date findings reported and discussed separately in different contexts.

